書評

佐竹保子『西晉文學論—玄學の影と形似の曙—』

青山剛一郎
京都大學

本書の『西晉文學論』という題を初めて見て、潘岳・陸機のことに思い至らない人は少ないに違いない。しかし、本書の目次を見れば、その思いは鮮やかに裏切られる。本書は六章から成るが、潘岳・陸機のためには一章も割かれていない。本書全體を通して見てもその影は薄い。本書の特徴はこの一點にあると言ってもよい。

西晉の文學に對する研究は、近年とみに增加している。しかしその對象は、陸機と潘岳の詩賦、それも『文選』に收錄されている作品に多くを占められている。二人は確かに西晉を代表する詩人である。その評價から見れば、その詩文によって西晉という時代の文學を語ることもある程度は可能であろう。しかし、西晉はさまざまな人がさまざまな文體において、文學に對する實驗を試みている時代である。陸機や潘岳以外の作者や詩賦以外の文體にも目を向けなければ、この時代の文學を總體的にとらえることはできないのではないだろうか。

本書はそのような考えに基づいて編まれた西晉文學に關する論集である。著者は、陸機・潘岳の詩は必ずしもその前後の時代の文學と滑らかに繫がらない、と言う。本書の副題に見られるとおり、著者は西晉の文學の中に、前代から續くものとして玄學の影響を求め、この時期に始まり後世の謝靈運や鮑照に受け繼がれるものとして「形似」、つまり自然をそのままに言葉で寫し取ろうとする手法の端緒を探る。そのために取り上げられるのは、皇甫謐、夏侯湛、張華、束晳、張協、郭璞の六人である。ここでそれぞれの詩人が割り當てられる各章ごとに內容を見ていくこととしよう。

第一章は、皇甫謐（二一五～二八二）に當てられ、「釋勸論」を中心とした論考となっている。「釋勸論」は設論のジャンルに屬する。設論は主客の問答を通して、客の「仕」に對する主の「隱」の論理を語るジャンルであった。魏の時代、阮籍や嵇康によって深められた隱逸の哲學が、西晉では文學の中に廣く浸透していく。それはこの時代に獨特の「招隱詩」が作られ、また『藝文類聚』卷三十六・三十七「隱」の部において西晉時代の作品が格段に增えていることからも確認できる。そのような環境の中で、皇甫謐は隱逸の實踐者であり、しかも當時の社會にも後の時代にもかなりの影響力を持った人物であった。著者は皇甫謐の「釋勸論」を前後の時代の設論のジャンルの流れの中に置く。その中で「釋勸論」は、治世における「隱」と「仕」を同價値のものであると位置付けた初めての設論であり、後の出處同歸論の端緒の一つとなる、と言う。著者はまた、皇甫謐の「高士傳」と「列女傳」の文體が具體的で飾り氣のない淡泊な質實さを持つと同時に、特に「列女傳」の記述が「生々しい野性的な匂い」を持つことを指摘する。そして、それを六朝における隱士の複雜さとしてとらえている。

第二章では夏侯湛（二四三～二九一）が扱われる。夏侯湛の一族は魏の曹氏の姻族であり、西晉の時代にあっては、翳りを見せながらも上流貴族として存在していた。これまで夏侯湛の文學はほとんど顧みられることが無く、『文選』にもその「東方朔畫贊」が採られるのみである。著者はまず夏侯湛の「昆弟誥」を取りあげる。「昆弟誥」の內容は本來ならば「戒」のジャンルに屬するべきものであった。しかし、「昆弟誥」は「皐陶謨」を主とした『尙書』の「誥」の文體をパロディとして用いている。「誥」とはそもそも王が臣民に對して宣言や戒めを行った文章であるが、夏侯湛の「昆弟誥」では、それが一族の稱揚と夏侯湛から弟たちへの戒めにすりかえられている。著者はこれを、國家より「私」を重要視する時代の風潮の現れと見る。そして更に「羊秉敍」や「辛憲英傳」等の一族の死者について述べた文章に觸れ、その「存續」「持續」することへの執着と、「直情性」に乏しい冷靜な描寫を指摘する。そう

した「持續」への執着と冷靜な描寫は彼の詠物賦にも現れている。そして、その精緻な觀察眼とそれにもとづくこまやかな描出が山水の描寫に對して發揮されたとき、謝靈運の山水描寫や謝朓の情景描寫に繋がっていくと結論付けている。

第三章は張華（二三二～三〇〇）である。張華は寒族から身を起こして、宰相にまでなり、二陸や左思等を推擧して、彼らの領袖的存在であった。著者はその「鷦鷯賦」、「女史箴」、「遊獵篇」、「遊俠篇」、「答何劭詩」等に見られる『老子』の言説を指摘し、張華の詩文の重要な部分に老子の思想が編み込まれているとする。次にその「情詩」五首を連作の男女の相聞の贈答詩ととらえ、潘岳「内顧詩」二首や陸機、陸雲の「爲顧彥先贈婦」のような詩を生み出す空氣を醸成したのが張華ではないかと言う。そして張華が「情詩」に見られるような「兒女の情」を描き得た一つの要因として、「水」「谷」「牝」「雌」をより價値あるものとする『老子』に近い發想を張華が持ち、舊來の價値觀では柔弱、卑弱とされていたものにより深く目を注ぐ契機を持ち得たことを擧げている。

第四章は束晳（二六四頃～三〇三頃）に關する論考である。束晳は『汲冢書』の校訂者であり、禮學者でもあった。束晳の「玄居釋」は、一章で論じられた皇甫謐の「釋勸論」と同じく設論のジャンルに屬している。その内容も一見すれば、「釋勸論」の出仕と隱逸を同價値とする思想を受け入れているかのようである。しかし、結局最終的には隱逸に重きを置く。著者はその原因を書き手の儒學の素養に由來するところが大きいと考える。次に扱われるのは、「勸農賦」や「貧家賦」、「近遊賦」といった諷刺性の強い作品である。著者は陶淵明の「農事詩」等と比較することによって、そこに外部の現實を迫眞性を以て描寫する「形似」の手法を見出す。また「近遊賦」に見られる禮法をなみする世界を肯定的に描くところに、禮學者の現實への絶望の深さと、「目前の現實にとらわれてそこに滯るまなざしの傾向」を讀み取る。一方、束晳には『詩經』の逸詩を補うという「補亡詩」が存在する。この「補亡詩」は自然の草木を鮮やかに描き出し、そこにはやはり「形似」の手

法を見出すことができる。著者は、儒學者束晳の文章においては、「形似」の手法が本來の自然描出ではなく風諭すべき現實を描くために用いられ、本來の目的に生かされた唯一の例外が、『詩經』に通じる理想の世界を描いた「補亡詩」であろう、と言う。

第五章では張協（？～三〇七頃）について述べられる。張協は三張の一人として名を知られ、『詩品』等にも高い評價をされている。著者はその「雜詩」十首と「七命」に注目して、その「形似」の手法が後世の詩に影響を與えたことを述べる。「雜詩」十首については、連作詩として三部の構成に分ける。そしてそれぞれの詩について詩語やモチーフが後世の作品にいかに影響を與えたか、用例などを調べることによって明らかにし、この詩の「形似」の手法や語彙、モチーフが東晉の初期山水詩、玄言詩の詩人たちや陶淵明に承け繼がれ、更には謝靈運、鮑照、謝朓たちに大きな影響を與えていると言う。「七命」には、それまでの「七」のジャンルには無い、劍と果實の描寫方法が採られている。その敍法の特質は、「對象の形態への沒入」、「その細やかな描出」、「女性の姿態を借りない對象それ自體の艶やかさやエロスの表現」であり、更にその對象は「清冽感、冷涼感、透明感、流動性を湛えたものに偏」るとする。

第六章は、郭璞（二七六～三二四）に關する論考である。著者はまず「山海經圖贊」と『莊子』と郭象『莊子注』との比較を行う。そこから、郭璞の一般には「異形」とされている物たちへの注視が窺え、それが新たな素材の發見と表現の開拓をもたらしたと推測する。その素材の發見と表現の開拓は、「江賦」にも現れる。「江賦」には、『山海經』等に登場する奇怪な生物の列擧、魚と鳥と水草の敍述に垣間見られる清新な情景描寫、さらには當時の道敎の敎義に借りた新しい仙境の描出が見られる。そしてそれまでの河や海を描く賦とは異なり、中心から周緣の逸民の世界へと移動する人々を描き得ている。『文選』所收の「游仙詩」七首においては、著者はこの七首を其一から其七まで連結しあうものとし、其七から更に其一に循環する構成を持つと考える。そしてその內容は「仙化の前提としての隱

逸の稱揚」、「仙化を遂げ得ぬ不安と絶望」、詩一首全體を貫く「俗界への拒絶と否定」という從來に例のない特異なモチーフがその六首を占め、前代から踏襲されてきた仙界の幻想的描寫というモチーフの詩は一首にすぎない。しかしその特異性を生かし、そして踏襲性をも活性化させるのは、七首の選擇と構成の妙であったと言う。最後には郭璞と、本書全體をまとめる意味で、郭璞の自然描寫と皇甫謐、夏侯湛、張華、束晳、張協の描寫方法との關連を述べ、さらに後世の謝靈運の山水描寫の一端を張協や郭璞に求める。

以上、章を追って本書の内容を要約してきた。以下、その内容についていくつか私見を述べてみたい。

先ずは、張華の情詩と『老子』との關連について。著者は、張華が「兒女の情」を描き得た一要因として、『老子』の發想を擧げる。著者が述べるように、確かに張華の作品では老子の言説が重要な働きをすることが多いようである。しかし、一方でまた著者が述べるとおり、『老子』は當時三玄の一つとして絶大な影響力をもっていた。誰もが大なり小なりその影響を受けたのであって、張華のみを特筆することはできないように思われる。『老子』の影響があったとすれば、それは當時の文壇全體に及んでいたであろう。むしろそれよりも、情詩の制作にはそれを作る場の存在があったことが大きいのではないだろうか。例えば、建安時代には、情詩とは少しく趣きを異にするが、女性の悲しみを賦に詠むということが文壇で行われていた。曹丕の「寡婦賦」の序に、

陳留阮元嶤、與余有舊、薄命早亡。故作斯賦、以敍其妻子悲苦之情。命王粲等並作之。

（『文選』卷十六、潘岳「寡婦賦」序、李善注）

と言う。つまり、夫を亡くした阮瑀の妻の悲しみを代辯した作品を當時のサロンで詩人たちが競作していたのである。同じような作品に「蔡伯喈女賦」がある。現在は曹丕の序の一部と丁廙の斷片しか殘らないが、これも匈奴の地に嫁し、また中國に連れ戻されたという蔡琰の悲しみを建安の詩人たちが代辯した作品であろう。詩の方に目を向けてみれば、徐幹「室思詩」や繁欽「定情詩」、曹丕「代劉勳妻王氏雜詩」、「寡婦詩」や曹植「棄婦詩」、「雜詩」の一部等、

サロンで作られたと言う記述は無いが、「兒女の情」を詠んだ情詩は多數存する。建安の文學が盛んであった當時、「兒女の情」あるいは女性の悲しみを詠んだ賦や詩がそのサロンで多く作られていたのかもしれない。そしてそのような場の存在は綿々と晉にも續き、張華や陸機、潘岳の屬するそれぞれの、或いは時に同じ文學集團の場で「情詩」、「爲顧彥先贈婦詩」、「內顧詩」等の作品が作られていたのではないだろうか。現存する作品が少ないだけで、その狀況は我々が想像するより活發であったかもしれない。上に擧げたような建安の女性のみの心情を詠む「情詩」に對して、張華・陸機・潘岳の作品のような男女間の相聞、或いは男の立場の心情を詠む「情詩」がどのようにして生まれたかは詳しく論ずる用意がないが、その文學集團の中での創作の際に設定されたテーマのようなものとも考えられよう。少なくとも「情詩」を『老子』と結びつけるには說得力が不十分なように思われる。

次に束晳の風刺の文學と「形似」の關連についてである。著者は、その「勸農賦」と「貧家賦」、「近遊賦」の風諭の對象の具體的で詳細な描出を「形似」の手法と關連づける。「形似」は本來、自然や風景の描寫の手法を表す言葉であるが、本書においては著者はその境界領域を「山水に限らない、さまざまな對象への詳細な觀察と具體的な描出」にまで擴げる。しかし「形似」の對象をそこまで擴大し、後世の謝靈運や鮑照の山水描寫と關連づけることは可能なのであろうか。そこにはあらゆる描寫を「形似」で片づけてしまう危險性をはらんでいるのではないだろうか。ここで擧げた束晳の風刺の文學は「形似」よりもむしろ當時の風刺と滑稽のあり方に關連づけられるように思われる。當時、「勸農賦」等のように社會の荒廢を風刺する文章が他にも作られている。本書にも擧げられる王沈「釋時論」と魯褒「錢神論」がその代表である。その中でも魯褒「錢神論」は風刺性と諧謔性の存する點で束晳の作品に近い。「錢神論」は隱者である魯褒が當時の貧しく卑しい者たちを憐れんで著したという。(『晉書』卷九十四隱逸傳) その內容は、司空公子と綦毋先生の對話形式を採り、司空公子が錢の效用を徹底的に詳細に述べる。錢を「家兄」と呼び、「孔

方」とあざなを付けるなど、錢の力を詳細に述べる部分を讀んで、讀者はその諧謔性に笑いを誘われながらも、當時の拜金主義の蔓延に思いを致さざるを得ない。この「錢神論」にも「勸農賦」等と同じく、詳細な描寫による諧謔と風刺という要素が見られる。このような風刺の型が當時存し、束晳や魯褒はそれに基づいて風刺を行ったのではないだろうか。その諧謔と風刺のバランスが崩れ、諧謔に傾く時、束晳「餅賦」のような作品が生まれるのであろう。范文瀾『文心雕龍注』が諧讔篇の「魏晉滑稽、盛相驅扇。……」の部分で擧げる當時の諧謔の例は、劉宋の袁淑が輯めた『誹諧文』中の「雞九錫文」と「驢山公九錫文」であるが、それぞれ鷄と驢馬の「德」を詳細に述べていくという形式を採っている。このような風刺や諧謔のあり方は必ずしも「形似」と結びつける必要はないのではないだろうか。

最後に本書の全體の構想について述べたい。評者は著者の、西晉時代が文學の様々な實驗の時代であったという基本的な立場には大いに贊同したい。先の要約を見ても分かるとおり、本書に扱われる作品は有名なもの、無名のものと合わせて多岐に渡っている。また有名であっても今まで研究が十分にされていなかった作品も多い。それは西晉文學の幅廣さを物語るであろう。こういった作品へ目を向ける機會を與えてくれた功績は大きい。

しかし、本書では影の薄い陸機や潘岳の詩文は本當に前後の時代に繋がりにくいのであろうか。著者の言うように、確かに「玄學」や「形似」は見出しづらいかもしれない。それではその他の繋がりを求めることはできないだろうか。

例えば陸機について考えてみよう。陸機には「文賦」がある。その中で次に擧げる部分は文章の獨創性を述べる部分として有名である。

必所擬之不殊、乃闇合乎曩篇。雖杼軸於予懷、怵佗人之我先。苟傷廉而衒義、亦雖愛而必捐。

（『文選』卷十七）

しかし、その獨創性も陸機の心の内のみから出るものではない。同じく「文賦」冒頭に、

佇中區以玄覽、頤情志於典墳。遵四時以歎逝、瞻萬物

而思紛。悲落葉於勁秋、喜柔條於芳春。心懍懍以懷霜、志眇眇而臨雲。詠世德之駿烈、誦先人之清芬。遊文章之林府、嘉麗藻之彬彬。慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文。

とあるとおり、「典墳」つまり儒教の古典のみならず、「文章之林府」、「麗藻之彬彬」という陸機以前の作品を消化吸収してから得られる獨創性である。また「文賦」という作品自體も、

余每觀才士之所作、竊有以得其用心。夫放言遣辭、良多變矣。妍蚩好惡、可得而言。每自屬文、尤見其情。恒患意不稱物、文不逮意。蓋非知之難、能之難也。故作文賦、以述先士之盛藻、因論作文之利害所由。佗日可謂曲盡其妙。至於操斧柯、雖取則不遠、若夫隨手之變、良難以辭逮。蓋所能言者、具於此云。

と序に言うように、「才士之所作」を讀んだ後に得た結果として書かれているのである。それは、「文賦」本文には先人の作品自體は表れないのに、「述先士之盛藻」と述べられていることからも分かる。陸機はこのように前代の作品と繫がりを持とうとする意識が強いように思われる。

「文賦」以外にも、「擬古詩」でも同じことが言えよう。辛夏寧「擬古詩の變遷について――陸機から李白まで――」（『中國文學報』第六十三册、二〇〇一年十月）では、陸機以降の陶淵明や鮑照等の「擬古詩」が、「漢魏詩や古樂府のモチーフや言語表現を斷片的に借用するのに止まっており、特定の詩の表現樣式を全面的に模倣することはなく、「既存作品を模擬するという前提のもとで、古詩や古樂府の中に抒情の典型を見出し、自らの詠懷を補助するものであった」のに對し、陸機の「擬古詩」は、「もとうたである古詩との用語の重複を避けるように苦心してはいるが、詩のテーマはもちろん、字句や構成をいちいち對應させており、まるでもとうたを透き寫しているかのようである」と論ずる。つまり、陸機の「擬古詩」は既存の「古詩」との繫がりがより強いのである。

また、陸機の「遂志賦」の序として次のような文章がある。

昔崔篆作詩、以明道述志。而馮衍又作顯志賦、班固作幽通賦、皆相依倣焉。張衡思玄、蔡邕玄表、張叔哀系、

此前世之可得言者也。崔氏簡而有情、顯志壯而泛濫、哀系俗而時靡、玄表雅而微素、思玄精練而和惠、欲麗前人、而優游清典、漏幽通矣。班生彬彬、切而不絞、哀而不怨矣。崔蔡沖虛溫敏、雅人之屬也。衍抑揚頓挫、怨之徒也。豈亦窮達異事、而聲爲情變乎。余備託作者之末、聊復用心焉。（『藝文類聚』巻二十六）

陸機は自らの「遂志賦」を作るに當たって手本とすべき前代の志を述べる賦を選別し、評價を與える。それは陸機がいかにそれらの賦を消化吸收していたかを表すであろう。

上に擧げた「擬古詩」や「遂志賦」はしばしば行きすぎた模倣として非難されるけれども、前代の作品から消化吸收したものをいかに自らの創作に生かすかという過程、あるいは結果がそこに表れている。そのような創作が「文賦」のような文學理論を著す際に必要であったのではないだろうか。

陸機に限らず他の詩人についても、このような「繫がり」は作品の表面には必ずしも表れないかもしれない。しかし、文學の影響關係は必ずしも詩人同士の明確な點と點で結びつけられるわけではないのであり、このような前代との「繫がり」が存することも考えられてよいのではないだろうか。西晉時代の文學と前後の時代の文學との繫がりを「玄學」や「形似」のみに限定してしまっては、西晉時代に行われたという文學の「實驗」の多樣性を矮小化してしまうことになる。陸機や潘岳を、偏るにせよ、疎かにするにせよ、突出した存在として扱うのではなく、他の詩人と同樣、西晉時代の文學を擔う一人として扱う態度が必要になるであろう。潘岳・陸機についても、確かにそれに關する卓論は存在するが、まだまだ研究すべき餘地は殘されているように思われる。例えば、本書から玄學と形似の流れが前後の時代に繫がるものとして重要であったことは確認し得る。それでは當時を代表するとされる潘岳・陸機は本當にこの流れの中に存在しないのか。本當に存在しないとすれば、それはなぜなのか。さらなる說明が必要になるのではないだろうか。

聊か私見を述べてきたが、これも全て本書の陸機・潘岳の影の薄い「西晉文學論」という新鮮な觀點に刺激されて

得た考えである。本書は今後西晉文學研究で取り扱われる題材の多様化に大きな影響を與えることであろう。

（汲古書院、二〇〇二年、本文四三四頁、人名索引十一頁、中文要旨十頁、英文目次三頁）